まいんど マインド Mind

遠寿院の行堂改革（続編）

藤田 庄市 ジャーナリスト

シリーズ〈83〉

岸本英夫（1903～64）による「修行」の古典的定義にはこうある。

「行とは、特定の宗教的理想を目指して、定型的な行動を通じて、心身を鍛え深めることである」

しかし修行の場において、環境と行の外見がいかに立派であろうとも、行僧自らが宗教的理想の達成を妨げる体制をつくり、行為をとるのであれば、それは行ではない。「厳しさ」を標榜すればするほどただの暴圧と化す。

日蓮宗遠寿院（千葉県市川市）の寒百日大荒行（遠寿院流祈祷修法相伝加行）の改革についてはすでに報告した（本紙2月27日号）。その続編として、肝心の「宗教的理想」への接近はどうであったか。その一端を伝えよう。

行場は結界され、その中心である読経三昧堂の本尊は鬼形鬼子母神（尊神）である。その左右に一対の偈文、「寒水白粥凡骨将死」「理懺事悔聖胎自生」、が掲げられている。前者は行の外形的様相、実践を、後者は行僧のあるべき内証すなわち内面の悟りを示している。世間では前者の過酷さのみ喧伝されているが、それだけでは単なる傲慢な自己宣伝にすぎない。行であるならば宗教的理想に接近できたかが問題なのである。

100日のうち、とりわけ最初の35日間は「自行段」と称し、専ら自己の犯してきた罪を懺悔する。偈文の「理懺事悔」はそのことを指している。仏道修行は懺悔がないところに成立しないが、偈文は「理懺事悔」と特別な言葉で懺悔を求め、すなわちそれが「聖胎自生」つまり「真理を悟る智力を頂き、遂に御仏とちがわない浄い尊い姿となること」（戸田日晨伝師）に直結すると宣言している。その懺悔の深刻さと、仏性の深遠さが理解できなければ、荒行はただの武勇伝に陥ってしまう。

三上顕要（35）はこう告白する

「読経中に自分の過去の罪が次から次へと思い出されて、きつかったです。中学から高校の頃の家族への暴言、友人への意地悪、僧侶になってからは後輩への指導で手をあげたことも。罪悪感がずっしりと身に積もり、尊神に額ずき懺悔を重ね、自分が変わりたいと切実に思う毎日でした。自分がいかに弱いかを気づかされました」

それが自行段も終わりに近づくと、心に変化が生じた。縁ある人たちや先輩僧、同輩僧への「ありがとう」の思いが、寒いとか疲れる、よりも先に湧いてきたのである。三上はそれを「気持ちが満たされる」と表現し、「法悦」とも言った。ただの感謝の念ではないことがわかる。

また原裕真（29）は「凡骨将死」の偈が肉体だけでなく、懺悔の辛さによって心も「死（かれ）なんとす」であると感じていた。入行して60日から70日目ぐらいの朝のことだった。窓側で読経中、原の太ももあたりに陽光が差し込んできた。その暖かさ。「ありがたい」と思うや、連鎖的に縁ある人たちへの感謝の念が溢れ出てきた。

そこには「素直にありがとう」と言える自分がおり、「仏と同じ清らかな心」を感じた。これが「聖胎自生」なのか、と腑に落ちたのだった。原はそれまで尊神に向き合うことを極力避けてきたが、その時の尊神の表情はいつもとは違って見えた。「前向きに生きてゆく力をもらった」。もはや行を辛いと感じることはなかった。

木名瀬陽宏（34）もまた「聖胎自生」の気づきを得た。読経三昧の日々を行じるうち50日も過ぎると、有縁の人たちのみならず神仏への感謝の念が強くなってゆくのがわかった。最初は身を切る冷たさだった水行は「（桶の）一杯一杯がありがたいお水」と感じるにつれ、水神に護られていると思った。さらに尊神が護ってくれているという実感が強まるにつれ、それは「心の中にいつもいてくださる」確信に深まった。「本当に不思議な感覚」だった。その感覚の言語化を強引に求めたら、「つつまれる」「満たされる」と表現した。

平野顕賢（45）は原や木名瀬とはいささか異なる気づきを得た。伝法と行の最高責任者である戸田日晨伝師（遠寿院伝燈36世）の講義の折、「人は生まれた時から一人一人尊い」との言葉は、平野の「心に沁み、涙が出るくらい感動」したのである。だが突き放せば、その言葉はありふれたものだ。平野が知らなかったわけはない。だが、なぜ平野は感動したのか。

じつは平野には入行からずっと、同輩僧の行動パターンに嫌悪感や苦手意識があり、その嫌な部分に強く目が向いていた。年も明け、行も終盤に差し掛かっていたころ、伝師の講義があったのである。自分とは合わない相手も、この世に生を受け、多くの人に愛され、支えられてきたはずだ。平野はその気づきによって、誰とも同じように接するべきだと心から思えた。論理による理解ではない。行中であればこその体得だった。平野はこの気づきを「ひとときの悟り」と言い表した。

なお平野は野菜などの「ご供養」をしてくれる檀信徒への感謝の言葉も忘れなかった。過酷な行の中で、「白粥」に加わる野菜類が命をつないでくれることを、行僧は身をもって切実に感じざるを得ない。その生命にかかわる気づきは、荒行のなかでこそ心の深部から生まれる。

上記の三上、原、木名瀬、平野は初行だが、村野仁誠（38）は参行（3度目）だった。行中の大黒祭において、参行僧は密伝相承の資格がある。そのため自分の寺に新たに祀る大黒天像を行堂に持参し、「拝み倒すことだけ考えて」入行した。日を追うごとに大黒天に親しみが増し、守護してくれるとの感覚が深まっていった。1月、深夜の密伝において、村野は大黒天の臨在を確かに感じたのだった。そして、大黒天の力をもって人々に福を与えるのが自分だと思っていたのが、じつは檀信徒に支えられ福を授けられたのは自分だったことに気づかされた。

村野の「拝み倒さねば守護神にはなってはもらえない」との姿勢や言葉は初行僧たちに伝わった。原は出行した時、尊神が背について護ってくれていることを感じ、「祈祷の時、背を押してくれる実感がある」という。村野や木名瀬、原のように尊神はじめ神仏との合一感を明言しないまでも、11人の入行僧はそれぞれに宗教体験があったことが、短いインタビュー中の片言隻句からうかがわれた。

村野は、再行僧が威圧することなく初行僧たちを尊重し、寄り添い、かつ厳しく指導するのを見ていた。彼は「行僧がお互いに尊敬の念を抱いている」のがわかった。そうした人間関係において、初行僧が再行僧を「再行」にふさわしくし、彼らがまた自分たち参行僧を「参行」にしてくれるのだと気づいた。

そうした行堂の在り方でなければ、行僧が「聖胎自生」の境地に至ることはできないであろう。さらに、「感応道交」は「聖胎自生」が達成されてこそ可能なのである。

（文中敬称略 年齢は入行時現在。なお筆者は同院行堂改革の外部委員であり、叙述はいささかモデル化している面があるが、公正を期したつもりである。文責はすべて筆者にある）

ふじた・しょういち／1947年東京生まれ。フォトジャーナリスト。聖護院准大先達。日本写真家協会会員。山岳修験学会評議員。著書『修行と信仰』（岩波書店）『行とは何か』（新潮社）、『熊野、修験の道を往く』（淡交社）『四国八十八カ所』（学研）『カルト宗教事件の深層』（春秋社）、写真集『伊勢神宮』（新潮社）ほか多数。

成満会で、初めて檀信徒に祈祷をする初行僧（左）。授与された許証に見入る村野仁誠氏（下）

行堂改革を進める戸田伝師

懺悔・感謝・守護 気づきを得た荒行僧